

## アジア太平洋戦争における徴兵の可能性と死亡リスク

### —戦争研究への社会調査データの利用可能性—

関西学院大学 渡邊勉

#### 1. 目的

アジア太平洋戦争による死亡者数は、兵士約 230 万人、民間人約 80 万人といわれている。しかし公表されているデータから、誰が死んだのかを知ることは難しい。これまで森岡(1991)や橋本(2013)の研究はあるが、断片的な分析にとどまっている。本報告は、社会階層と社会移動調査の個票データを利用することで、アジア太平洋戦争時の死亡とその背景にある徴兵が属性(学歴や職業)によって異なっていたのかを検討し、戦争研究への社会調査データの利用可能性を考える。

#### 2. 方法

本分析では 1965 年の SSM 調査のキョウダイデータを主として利用する。本データは、対象者本人の、死亡者を含むすべての男兄弟の属性(キョウダイ順位、学歴、主な仕事、居住地等)の情報を利用する。キョウダイデータについては 4457 サンプルあり、1895 年以前生が 3.1%、1896-05 年生が 8.9%、1906-15 年生が 16.8%、1916-25 年生が 19.8%、1936-45 年生が 31.3%、1946 年以降の出生が 6.9%である。

#### 3. 結果

本データから、時代による死亡率の変化を描くと、3つの特徴を指摘することができる。第一に、人口動態統計よりも死亡率が低い。その理由としては乳幼児の死亡が補足できていない可能性が考えられる。第二に、戦前は死亡率が高く戦後は低い。この傾向は、どの年齢層でも当てはまる。第三に、戦時期に死亡率が大きく上昇する。特に 20-40 歳の死亡率は、1940 年以前が 8.0%であったものが、戦時中は 19.2%まで上昇する。

次に、戦時中に属性によって死亡確率(死亡リスク)に違いがあるのかについて検討した。まず死亡リスクが時代によって異なるのかを、年齢別に分析してみた。その結果 20-40 歳の死亡リスクが、時代の影響を受けており、特に 1941-46 年の死亡リスクが高くなることがわかった。

さらに、20-40 歳の死亡リスクに焦点をあて、属性による違いがあるのか分析した。その結果、特に 1941-46 年に注目すると、上層ホワイト(専門・管理職)は死亡リスクが低く、農業は死亡リスクが高いことがわかった。さらに高等教育学歴はリスクが低いことが明らかとなった。

#### 4. 結論

以上より、戦時中の死亡リスクに不平等のあることが明らかとなった。その背景には徴兵の不平等との関連が推察され、過去におこなった職歴データの分析結果とあわせると、高階層(上層ホワイト、高等教育)は徴兵可能性が低いがゆえに死亡リスクが低いのにに対して、低階層(農業)は徴兵可能性が高いがゆえに死亡リスクが高いと考えられる。これらの分析を通じて、戦後の社会調査データから、ある程度戦時中の人々の実態(徴兵、死亡)を明らかにできることがわかる。

\*SSM 調査データの利用にあたり、2015SSM 調査管理委員会の許可を得ました。記して感謝いたします。